

〔事例報告〕

徳川美術館教育普及活動三十年の歩み

はじめに

一 徳川美術館の教育普及活動

二 小・中学生を対象にした教育普及活動

三 教育普及事業に関わる連携

(一) 愛知県博物館協会「子どもと博物館研究会」

(二) 文化庁「エデュケーター研修」

四 徳川美術館ボランティアの会と教育普及

おわりに

はじめに

徳川美術館を運営する公益財団法人徳川黎明会は、昭和六年（一九三二）に尾張徳川家十九代義親（一八八六―一九七六）によつて設立された。設立当時は「財団法人尾張徳川黎明会」と称したが、同二十二年に「財団法人徳川黎明会」と改称し、平成二十三年（二〇一一）に現名称となっているもの

徳川美術館教育普及活動三十年の歩み

加藤 啓子

の、財団の基本運営方針は継承されているため、本稿での表記は以下「財団」で統一する。

財団設立の目的は、昭和六年十二月三日付の「財団法人 尾張徳川黎明會設立趣意書」には次のように記されている。

藩祖義直以來三百年當家ニ傳來セル多數ノ什寶美術品及古書籍ノ内美術工藝上貴重ナルモノ若クハ歴史上珍重スベキモノ又ハ古書籍等ニテ稀覯ノモノ尠シトセズ此等ノ什寶珍籍等ハ永ク個人トシテ死藏スベキニアラザルヲ以テ今回財団法人ヲ設立シテ舊藩地名古屋市ニ美術館ヲ建設シ（中略）傳來ノ什寶美術品ヲ永遠ニ保存シ且世ノ美術家工藝家ノ研究參考資料ニ供シ（以下略）

また、「財団法人 徳川黎明会寄附行為」においても、

本会ハ美術並ニ史学ノ研究ニ資スル為尾張徳川伝来ノ什宝ノ保存其ノ他美術品ノ蒐集保管公開ヲ為シ且ツ之ニ関スル指導奨励ヲ為スヲ以テ目的トス

とあり、美術館活動の根幹は、「研究ニ資スル為」であり、その延長線上

に美術品の収集・保管・展示があった。当然のことながら、財団設立当初には教育普及活動の発想は希薄であった。

財団設立から四年後の昭和十年十一月十日に徳川美術館は開館した。名古屋の文化発展に大きく貢献することを期待されながらの華々しい開館だった。徳川美術館は開館当初、一ヶ月から一ヶ月半毎に展示替えをすることで、より多くの所蔵品を観覧に供し、その他に年二〜三回特別展覧会を開催し、同十年から同十八年の間に合計二十回の特別展覧会を実施した。特別展覧会では美術館の所蔵品だけではなく他所の所蔵品も借用して、特定のテーマの下に総合的な展示を行っている。しかし、戦況の悪化により、同十八年十月からは臨時休館となり、同二十年五月十四日の空襲による爆弾の弾片や爆風により、建物に甚大な被害を被ったため、復旧工事を終えて再開館したのは、同二十二年十一月からである。しかし、再開館後も戦前の活動は踏襲されたため、調査・研究・展示が主体の博物館という枠にとどまった活動であった。

徳川美術館の活動が大きく展開したのは、開館半世紀を経た同六十二年の新館増築に拠るところが大きい。徳川美術館本館（以下「本館」という）での展覧会だけではなく、新館において常時所蔵品を紹介できるようになったことで、「大名文化」をあまねく体現できる美術館としての独自性が発揮できるようになり、調査・研究・展示のみならず、それらを下地にしたさまざまな教育プログラムを本格的に実施することが模索された。新館増築を前にして学芸部内に普及課を設け、教育普及を担当する事務職員を置き、ボランティア制度を新たに導入するにあたり、筆者は教育普及担当として位置付けられたわけである。さらに、美術館が社会における教育活動の一端を担う必要性に迫られながら、地域と連携し、大人だけではなく子

どもや障がい者に向けても教育普及活動を展開するようになった。以後、徳川美術館では試行錯誤を繰り返しながら、「大名文化とは何か?」「近世大名とは何か?」の問いに応えられる美術館として、調査・研究・展示と同等に教育普及活動を積極的に展開してきた。

本稿では平成二十九年（二〇一七）に新館開館三十周年を迎えるにあたって、徳川美術館での三十年間の教育普及活動を振り返り、その経緯と評価、そして問題点・課題を示し、今後の私立美術館としての教育普及活動の展開について探りたいと考える。

一 徳川美術館の教育普及活動

昭和二十七年（一九五二）に教育基本法が制定され、その第九条において初めて博物館は図書館と共に「社会教育のための機関」と定められた。そして、同法に基づいて同二十七年に制定された博物館法によって「美術館」は「博物館」に含まれる機関とされた。徳川美術館も、博物館法に基づき愛知県下の登録博物館第一号の認定を受けて社会教育機関としての責任を負うこととなったものの、先述の通り活動の主体は、従前の調査・研究・展示の他に、同二十四年に開始された所蔵品を茶事に用いて鑑賞する茶会などに留まっていた。

しかし、それを遡る同二十二年十一月の徳川美術館再開館からは名古屋市との共同主催として「名古屋市文化史教室」展を開催したことは特筆される。この教室は当初は展覧会のみであったが、平成十七年（二〇〇五）以降は「夏休み子ども歴史教室」として毎年継続実施する事業に発展した。この活動は展覧会としての活動を含めて平成二十八年までに九十五回を数

える。これが徳川美術館における教育普及活動の萌芽として位置付けられる活動である。

そして、昭和五十一年に尾張徳川家二十代義宣（一九三三―二〇〇五）が館長に就任し、同五十八年に学芸員研究室・書庫および図書室とともに講堂を増設したことで、成人向けの講座である土曜講座や夏期講座が定期的に開催されるようになった。講堂の増築とあわせ、東海レディス・プラザよりグラランドピアノの寄贈をうけ、クラシックの名曲講座も年に二回から三回開催し、美術と音楽の芸術共演が実現した。このように教育普及活動が定期的に開催されるようになったものの、このころの年間入館者数は約四万から五万名と、まだ一部の美術愛好家が訪れる程度の知名度の低い美術館であった。

当館の在り方が大きく変わったのは、先述の通り同六十二年十月の新装開館からである。地元市民や経済界および自治体の寄附により、大名道具を常時紹介できる新館が増設されたことで、地域社会と美術館が密接な関わりを持つて、地域文化の向上をはかることが重要な使命となった。新館開館にあたり、職員数も二倍の十六名となり、チケットやミュージアムグッズを販売する雇員を増員し、組織機構の改編が行われた。美術館は業務部に広報課と管理課、学芸部に学芸課と普及課と、二部四課制となり、普及課には学芸員だけでなく、教育普及を担当する事務職員が配属され、学芸員とともに教育プログラムを担当するようになった。なお、平成十五年（二〇〇三）には学芸部の普及課が独立し、管理部の広報課と合併して企画情報部が創設され三部体制となった（ただし、企画情報部は平成二十五年に企画推進部と改称された。現在、広報事業は管理部、教育普及事業は学芸部の担当となり、昭和六十二年の体制に戻されている）。また、新館開館によって展示

面積も以前の約二・五倍となったことで、職員だけの運営は難しくなり、四章にて後述するボランティア制度を導入して、徳川美術館を応援する外部の人々や、地域との連携が本格化した。同六十二年度の入館者総数は二十七万五千二百七十三名と飛躍的に拡大し、以後現在に至るまで年間の入館者数は二十万名前後で推移するようになる。

近年、美術館・博物館は、市民の自己教育育成の場、市民の自己教育のための学習を支援する場としての役割が期待され、美術館・博物館が果たす役割は大きくなってきている。来館者が学ぶための資料提供、講演会や講座の開催、質問への対応など博物館の活動は多様化しており、徳川美術館もその要請に積極的に応える体制が整備されていた。職員の意識も調査・研究・展示という従来の枠から徐々に変化し、教育普及活動は、徳川美術館を支える重要な活動の一つとして位置付けられるようになった。

現在、徳川美術館では土曜講座・夏期講座・能楽講座・古文書入門講座・講演会・定期研究発表会・シンポジウム・ギャラリートーク・ガイドツアー・名曲講座・見学会・聞香や香袋づくりなどの体験教室といった成人向けの活動の他、土曜子ども教室・夏休み子ども歴史教室・体験学習といった子ども向けの活動など、多様な教育普及活動を展開している。これらの活動は、当館の大きなテーマである「大名文化の継承」を軸とした独自の活動であり、参加者からの意見・苦言を反映して改善を繰り返しながら、現在まで継続的かつ定期的に実施している。次章では、これらの活動の中でも、徳川美術館教育普及活動の柱として位置付けられる小・中学生を対象として実施した活動について検証を試みる。

二 小・中学生を対象にした教育普及活動

平成元年（一九八九）に社会科の学習指導要領の一部が、「（小学校）指導計画の作成に当たっては、博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行い、それに基づく表現活動が行われるように配慮する必要がある」と改正された。それまで、学校現場において美術館・博物館を活用することはあまり行われていなかったが、改正後、当館では小・中学生の来館者が増えた。

徳川美術館で小・中学生を対象にした活動を開始したのは、同三年の夏からである。新館開館以来、小・中学生の来館者数は増えていたにもかかわらず、子どもを対象とする解説やプログラムは行われていなかった。徳川美術館の場合、子どもだけで来館することはなく、保護者に引率されて来るのが大半で、美術館は子どもにとって内容を理解するには難しい場所であった。

そこで、まずは夏休みの展覧会で「クイズラリー」を実施し、子どもにも興味を持てるようにした。割引券のついたクイズシートを名古屋市内の小・中学校に生徒人数分の枚数を配布したところ、同三年七月二十一日から八月二十五日までの約二ヶ月間で二千六百二十六名の参加があった。また、参加者の住所を調べることによって名古屋市内各区の参加率を把握することができ、少なくとも名古屋市内における小・中学校での、徳川美術館の認知度が把握できたため、次回以降の広報・周知の参考とすることができた。

翌四年からは、先述の「夏休み子ども歴史教室」の一環として、クイズ



挿図1 夏休み子ども歴史教室 ギャラリー・クイズ



挿図2 夏休み子ども歴史教室 ギャラリー解説

に加え、ボランティアによる子ども向けのギャラリー解説「歴史教室」を始めた。クイズは夏休み中、毎日開館時間内に実施し、歴史教室は毎日一日三回・予約不要・無料で開催した。誰でも夏休みに来館すれば、自由に参加できるような体制を整えた。この体制は現在まで継続している（表1／挿図1・2）。

同十一年からは、解説ボランティアが一方的に解説するのではなく、体験を伴ったプログラム「体験学習」を推奨し、徳川美術館の所蔵品にある貝あわせの遊びや、鎧・兜づくり、模造刀の解体・組立や火縄銃にふれるなどのプログラムを展開するようになった。「体験学習」の進行および指導はボランティアが担当し、同十六年からは近隣の大学にも声を掛け、以後「夏休み子ども歴史教室」では学生ボランティアを導入している。

同十四年の学校五日制の実施に伴い、土曜日には小・中・高校生の入館

表 1 徳川美術館 夏休み子ども歴史教室 参加者数

実施年度	展覧会名	展覧会会期	日数	総入館者	小中生	クイズ	歴史教室	貝あわせ
平成3	波瀾をこえて	1991年7/6～8/25	44	32,779	2,487	2,626		
平成4	信長の時代	1992年7/25～8/30	32	33,233	5,105	4,897	1,862	
平成5	鉄砲伝来450年	1993年7/17～8/29	38	30,395	3,819	3,585	1,994	
平成6	大名のライフスタイル	1994年7/16～8/28	38	25,424	3,122	2,964	1,570	
平成7	吉宗vs宗春	1995年7/22～9/17	50	59,418	5,801	5,699	1,730	
平成8	秀吉の時代	1996年7/27～9/29	56	47,527	4,247	4,254	1,389	
平成9	名古屋のまつり	1997年7/12～8/31	44	25,085	1,808	1,715	531	
平成10	徳川慶喜	1998年7/18～8/30	38	27,258	1,982	2,307	754	
平成11	信長・秀吉・家康 戦国の覇者 三英傑	1999年7/17～8/29	38	36,773	3,897	5,047	1,421	1,522
平成12	葵 徳川三代	2000年7/29～9/17	44	38,134	3,291	4,238	1,310	1,294
平成13	姫君の華麗なる日々	2001年7/28～9/30	56	32,120	1,595	1,879	662	875
平成14	尾張の戦国武将たち	2002年7/20～9/29	62	32,389	2,394	2,970	965	1,137
平成15	のそいでみよう江戸時代	2003年7/19～9/28	62	34,174	3,002	2,982	1,359	1,583
平成16	攘夷と開国	2004年7/17～9/26	62	28,732	2,093	2,036	789	864
平成17	徳川美術館の名品	2005年7/30～9/25	50	54,662	2,593	1,895	1,111	907
平成18	天下人たちの時代―信長・秀吉・家康―	2006年7/22～9/3	38	30,939	3,251	2,941	1,357	1,267
平成19	天下取りへの道 戦国の武将たち	2007年7/21～9/2	39	28,086	2,388	2,101	990	919
平成20	徳川家康と戦国のたたかい	2008年7/12～8/31	45	34,251	3,484	2,146	886	855
平成21	信長・秀吉・家康の合戦	2009年7/18～8/30	39	28,596	3,800	2,234	1,204	1,042
平成22	大名古屋城展	2010年7/30～9/26	51	29,912	2,384	1,335	1,204	497
平成23	徳川の姫君	2011年7/30～9/19	46	29,505	2,050	1,241	920	496
平成24	江戸絵画ふしぎ探検	2012年7/28～9/2	33	17,763	1,851	839	852	510
平成25	徳川慶勝	2013年7/27～9/23	52	30,365	1,598	890	731	422
平成26	天下統一―信長から家康へ―	2014年7/26～9/28	56	34,298	2,792	1,543	1,248	669
平成27	徳川家康―天下人の遺産―	2015年8/1～9/13	38	34,404	2,909	1,730	1,256	511
平成28	信長・秀吉・家康―それぞれの天下取り―	2016年7/14～9/11	52	46,512	3,211	2,047	1,246	580

※夏休み子ども歴史教室は展覧会会期中の8月中旬開催。

土曜子ども教室 参加者数

実施日数	子ども	大人
45	1,268	734
45	1,116	708
44	1,237	797
46	1,823	794
45	1,355	754
45	1,031	542
44	1,090	606
44	966	481
45	936	407
46	853	446
46	868	404
46	591	330
46	818	441
44	824	430
33	605	327

28年度は12月までのデータ

料を無料とし、小・中学生を対象に「土曜子ども教室」を開始した。この活動も、土曜日の一日三回・予約不要・無料で誰でも開始時間に会場に行けば参加できる体制とした。指導は研修を受けたボランティアが担当する。展示作品を通して、日本の美術や歴史を学ぶことを狙いとし、まずは展示室でボランティアと一緒に展示作品を鑑賞し、実際に複製品を使って体験することを基本としている。

例えば、刀を説明するにあたり、「刀と太刀 刀は美しい」と題した説明を行い、「刀の解体・組立」体験を行ってもらおう。この時、解体できる模造刀に一礼後、鞘を払い、目釘を抜き、柄・切羽・鐔・切羽・鍔と順に解体し、刀身を持って、刀の姿や刃文をよくみて、重さを体感する。火縄銃を説明する場合には、「鉄砲伝来」の歴史を解説し、「火縄銃にふれる」体験として火縄銃を解体し、尾栓やからくりなどの構造を理解し、先込式の火縄銃の扱いを体験する。能であれば能楽について説明し「能面・小鼓にふれる」体験として、能面を子ども同士で着けあい、面を着けたときの視野の狭さを実感しながら歩く。絵巻物では「巻物―源氏物語絵巻―」の説明の後、子ども達が複製の巻物の紐を解き、表紙を巻き込みながら、巻物を左に開いたら、また右から巻き込む動作を繰り返しながら鑑賞した上で、「ミニ源氏物語絵巻をつくる」体験も行うといった、大名文化を学習できるプログラムとなっている。

このように、実際に模造刀を解体・組み立てたり、兜を着けて体感したり、陶磁器に触れたり、巻物を扱ったりと、自分で体験し、確かめることによって印象が強くなり、視野が広がり、作品に対する理解が深まるわけである。「土曜子ども教室」の内容は、その時に実施している展覧会の内容にあわせて月毎に替える。展覧会がそれまでになかったテーマを扱う場

合には、新たなプログラムを検討して実施しているため、開始以降、十五年をむかえた同二十八年時点で、五十九の解説プログラム、四十の体験プログラムが蓄積されている(表2/挿図3)。

なお、当館の子どもプログラムに参加する子どもたちは親子で来館し、子ども教室に親子揃って参加する場合が多い。プログラムは子ども中心だが、展示室での鑑賞は親も参加する。体験後、親子でもう一度展示室をまわる場面をよく見かける。今後、親子で作品鑑賞ができるプログラムも必要と考える。

こういった活動を通じて、個人単位ではなく、小・中学校の単位での美術館利用も多くなったが、これらはあくまでも徳川美術館に来館した小・中学生を対象とした受け身の活動であることから、言うなればただ見学の受け入れをするだけに留まっていたと総括することが出来る。そのため、



挿図3 土曜子ども教室

表2 徳川美術館 土曜子ども教室 平成14年度(2002)～平成28年度(2016)

平成14年(2002)					
	今月のポイント	体験内容	子ども	大人	小計
4月	家康と義直「こんにちは、私が義直です」	刀バラバラ体験	119	86	205
5月	刀と太刀「刀は美しい！」	刀バラバラ体験	121	101	222
6月	鎧と兜「武士の晴れ姿」	兜をかぶろうー忍緒の結び方ー	113	69	182
7月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれよう	181	95	276
9月	茶碗「僕たちのお茶碗とどう違うの？」	茶碗のいろいろー陶器と磁器ー	103	56	159
10月	茶碗のいろいろ	茶碗のいろいろー陶器と磁器ー	39	20	59
11月	日本の絵画「巻物」ー源氏物語絵巻を中心にー	源氏物語絵巻に色をつけよう	54	14	68
12月	日本の絵画「屏風」	源氏物語絵巻に色をつけよう	34	8	42
1月	お正月の遊び	子ども出世すごろく	70	27	97
2月	暮らしの道具・調度「お姫様の暮らし」	琴にふれる・貝あわせで遊ぼう	225	133	358
3月	お雛さま「お雛様のいろいろ」	琴にふれる・貝あわせで遊ぼう	209	125	334
年間合計			1,268	734	2,002
平成15年(2003)					
4月	家康と江戸幕府	兜をかぶろうー忍緒の結び方ー	74	57	131
5月	鎧と兜「武士の晴れ姿」	鎧にふれる	88	64	152
6月	刀と太刀「刀は美しい！」	刀バラバラ体験	120	106	226
7月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれる	119	78	197
9月	お茶碗	茶碗のいろいろ	78	43	121
10月	能面・鼓	能面・鼓	52	39	91
11月	日本の絵画「巻物」ー源氏物語絵巻ー	源氏物語絵巻のぬりえ	62	21	83
12月	日本の絵画「屏風」	掛軸をかけてみよう	18	9	27
1月	お正月の遊び	子ども出世すごろく	43	28	71
2月	お雛さまのいろいろ	お雛さまをつくる	200	121	321
3月	お姫さまの生活	琴にふれる・貝あわせで遊ぼう	262	142	404
年間合計			1,116	708	1,824
平成16年(2004)					
4月	鎧と兜「武士の晴れ姿」	兜・鎧にふれる	91	55	146
5月	刀と太刀「刀は美しい！」	刀バラバラ体験	98	114	212
6月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれる	51	34	85
7月	昔の手紙	手紙を書こう	92	47	139
9月	おもてなしの心ー茶の湯ー	茶碗のいろいろ	91	50	141
10月	能面・鼓	能面・鼓	198	124	322
11月	日本の絵画「巻物」ー源氏物語絵巻ー	源氏物語絵巻のぬりえ	126	78	204
12月	日本の絵画「掛物」	掛軸をかけてみよう	28	15	43
1月	お正月の行事	子ども出世すごろく	63	41	104
2月	お雛さまのいろいろ	お雛さまをつくる	213	120	333
3月	お姫さまの生活	琴にふれる・香木「伽羅」の香り	186	119	305
年間合計			1,237	797	2,034
平成17年(2005)					
4月	鎧と兜「武士の晴れ姿」	鎧・兜にふれるー忍緒の結び方ー	203	147	350
5月	刀と太刀「刀は美しい！」	刀バラバラ体験	213	127	340
6月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれる	191	94	285
7月	茶碗のいろいろー茶の湯ー	茶碗のいろいろ	114	52	166
9月	名古屋城地図さんぽ	掛軸をかけてみよう	95	42	137
10月	能面・小鼓	能面・小鼓	128	54	182
11月	日本の絵画「巻物」ー源氏物語絵巻ー	ミニ源氏物語絵巻づくり	223	34	257
12月	大名とお正月	子ども出世すごろく	90	0	90
1月	お殿さまと学問	和綴で本を作ろう	121	42	163
2月	お雛さまのいろいろ	お雛さまをつくる	235	97	332
3月	お姫さまのたしなみ	琴にふれる・貝あわせで遊ぼう	210	105	315
年間合計			1,823	794	2,617
平成18年(2006)					
4月	鎧と兜「武士の晴れ姿」	鎧・兜にふれるー忍び緒の結び方ー	163	99	262
5月	美術品の保存と収納	箱の紐のかけ方・包み方	110	58	168
6月	刀と太刀「刀は美しい！」	刀バラバラ体験	159	138	297

	今月のポイント	体験内容	子ども	大人	小計
7月	名古屋 城下町とまつり	掛軸をかける	117	79	196
9月	茶碗のいろいろ—茶の湯—	茶碗のいろいろ	115	62	177
10月	おとぎ草子と絵本	折本をつくろう	96	41	137
11月	日本の絵画「巻物」—源氏物語絵巻—	ミニ源氏物語絵巻づくり	114	43	157
12月	能面・小鼓	能面と小鼓	53	23	76
1月	大名とお正月	子ども出世すごろく	86	31	117
2月	お雛さまのいろいろ	貝あわせで遊ぼう	141	82	223
3月	お姫さまのたしなみ	琴にふれる	201	98	299
年間合計			1,355	754	2,109

平成19年(2007)

4月	刀と太刀「刀は美しい！」	刀バラバラ体験	150	72	222
5月	尾張徳川家の殿様	手紙と花押	111	59	170
6月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれる	106	81	187
7月	茶碗のいろいろ—茶の湯—	茶碗のいろいろ	57	54	111
9月	能面・小鼓	能面・小鼓	99	52	151
10月	和紙の美しさ	美しい紙を作る	73	30	103
11月	巻物—源氏物語絵巻—	ミニ源氏物語絵巻づくり	122	43	165
12月	大名とお正月	子ども出世すごろく	79	22	101
2月	お雛さまのいろいろ	貝あわせで遊ぼう	109	57	166
3月	お姫さまのよそおい	琴にふれる	125	72	197
年間合計			1,031	542	1,573

平成20年(2008)

4月	桃山・江戸の絵画	ぬりえ 江戸の絵	86	43	129
5月	鎧と兜 「武士の晴れ姿」	鎧・兜にふれる—忍び紐の結び方—	157	99	256
6月	刀と太刀 「刀は美しい！」	刀バラバラ体験	137	67	204
7月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれる	110	89	199
9月	茶碗のいろいろ—茶の湯—	茶碗をデザインする	83	39	122
10月	能面・小鼓	能面・小鼓	62	37	99
11月	巻物—源氏物語絵巻—	ミニ源氏物語絵巻づくり	92	42	134
12月	大名とお正月	子ども出世すごろく	45	16	61
1月	遊びながら学ぶ	江戸の遊び	59	25	84
2月	お雛さまのいろいろ	貝あわせ	144	75	219
3月	お姫さまのよそおい	琴にふれる	115	74	189
年間合計			1,090	606	1,696

平成21年(2009)

4月	鎧と兜 「武士の晴れ姿」	鎧・兜にふれる—忍び紐の結び方—	129	63	192
5月	刀と太刀 「刀は美しい！」	刀バラバラ体験	137	73	210
6月	美術のなかの動物たち	ぼち袋を作ろう	56	39	95
7月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれる	81	60	141
9月	茶碗のいろいろ—茶の湯—	茶碗をデザインする	68	31	99
10月	能面・小鼓	能面・小鼓	90	29	119
11月	巻物—源氏物語絵巻—	ミニ源氏物語絵巻づくり	77	38	115
12月	大名とお正月	子ども出世すごろく	41	10	51
1月	蓬菜・めでたいデザイン	包む・結ぶ—水引と鬘斗—	51	14	65
2月	お雛さまのいろいろ	貝あわせ	120	61	181
3月	お姫さまの暮らし	琴にふれる	116	63	179
年間合計			966	481	1,447

平成22年(2010)

4月	牡丹をめぐる	牡丹の絵を描こう	84	38	122
5月	鎧と兜 「武士の晴れ姿」	鎧・兜にふれる—忍び紐の結び方—	99	73	172
6月	東照宮祭礼	東照宮祭礼の巻物を作る	80	25	105
7月	刀と太刀 「刀は美しい！」	刀バラバラ体験	139	69	208
9月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれる	84	31	115
10月	徳川美術館のお宝	掛物をかける	87	29	116
11月	初音の調度 千代姫のお嫁入道具	箱の紐のかけ方、包み方	63	24	87
12月	大名とお正月	子ども出世すごろく	48	14	62
1月	能面・能装束	能面・小鼓	52	24	76

	今月のポイント	体験内容	子ども	大人	小計
2月	お雛さまのいろいろ	内裏雛をつくる	102	38	140
3月	お姫さまの暮らし	琴にふれる	101	42	143
年間合計			939	407	1,346

平成23年(2011)

4月	宮廷の雅	ひも結びで遊ぶ	80	37	117
5月	鎧と兜「武士の晴れ姿」	鎧・兜にふれるー忍び紐の結び方ー	99	67	166
6月	やさものの色とかたち	茶碗をデザインする	61	22	83
7月	尾張徳川家のお寺 建中寺	箱の紐のかけ方、包み方	65	30	95
9月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれる	58	18	76
10月	おもてなしの心ーしつらえー	掛物をかける	60	25	85
11月	巻物ー源氏物語絵巻ー	ミニ源氏物語絵巻づくり	91	38	129
12月	大名とお正月	子ども出世すごろく	41	13	54
1月	刀と太刀「刀は美しい！」	刀バラバラ体験	88	52	140
2月	お雛さまのいろいろ	貝あわせ	102	69	171
3月	お姫さまの暮らし	琴にふれる	108	75	183
年間合計			853	446	1,299

平成24年(2012)

4月	刀と太刀「刀は美しい！」	刀バラバラ体験	105	54	159
5月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれる	129	66	195
6月	徳川園の歴史	徳川園と蓬左文庫をめぐる	58	32	90
7月	能面・能装束	能面・小鼓	49	27	76
9月	織物のいろいろー織り・縫い・染めー	組紐体験	57	27	84
10月	おもてなしの心ーしつらえー	掛物をかける	35	22	57
11月	源氏と平家	ミニ巻物づくり	211	28	239
12月	大名とお正月	子ども出世すごろく	31	22	53
1月	日本の神様ー天神さんー	天神さんづくり	44	29	73
2月	お雛さまのいろいろ	貝あわせ	52	32	84
3月	お姫さまの暮らし	琴にふれる	97	65	162
年間合計			868	404	1,272

平成25年(2013)

4月	漆・ジャパン	漆の模様に親しむ	68	41	109
5月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれる	104	68	172
6月	刀と太刀「刀は美しい！」	刀バラバラ体験	81	47	128
7月	茶碗のいろいろー茶の湯ー	茶碗をデザインする	42	20	62
9月	鎧と兜ー武士の晴れ姿ー	鎧・兜にふれるー忍び紐の結び方ー	33	30	63
10月	和歌のアイドルー歌仙ー	百人一首で遊ぶ	31	12	43
11月	能面・能装束	能面・小鼓	39	16	55
12月	大名とお正月	子ども出世すごろく	26	4	30
1月	身近にあるめでたいデザイン	「総角」結び	29	13	42
2月	お雛さまのいろいろ	貝あわせ	31	18	49
3月	お姫さまの暮らし	琴にふれる	107	61	168
年間合計			591	330	921

平成26年(2014)

4月	刀と太刀ー刀は美しい！ー	刀バラバラ体験	96	62	158
5月	鎧と兜ー武士の晴れ姿ー	鎧・兜にふれるー忍び紐の結び方ー	104	66	170
6月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれる	80	51	131
7月	茶碗のいろいろー茶の湯ー	茶碗をデザインする	68	42	110
9月	墨の世界	墨で描く	77	41	118
10月	やまと絵ってなに？	やまと絵にふれる	53	19	72
11月	能面・能装束	能面・小鼓	54	20	74
12月	大名とお正月	子ども出世すごろく	41	16	57
1月	身近にあるめでたいデザイン	「総角」結び	82	21	103
2月	お雛さまのいろいろ	貝あわせ	76	44	120
3月	お姫さまの暮らし	琴にふれる	87	59	146
年間合計			818	441	1,259

平成27年(2015)

4月	国宝 初音の調度	貝あわせで遊ぶ	71	31	102
----	----------	---------	----	----	-----

	今月のポイント	体験内容	子ども	大人	小計
5月	刀と太刀―刀は美しい！―	刀バラバラ体験	126	91	217
6月	鎧と兜―武士の晴れ姿―	鎧・兜にふれる―忍び紐の結び方―	74	39	113
7月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれる	100	60	160
9月	能面・能装束	能面・小鼓	60	26	86
10月	徳川美術館のお茶道具	茶碗をデザインする	55	25	80
11月	国宝 源氏物語絵巻	ミニ源氏物語絵巻づくり	93	51	144
12月	大名とお正月	子ども出世すごろく	50	12	62
1月	身近にあるめでたいデザイン	「総角」結び	43	22	65
2月	ひなまつりを楽しむ	ひなかざりをつくる	64	32	96
3月	お姫さまの暮らし	琴にふれる	88	41	129
年間合計			824	430	1,254

平成28年(2016)

4月	刀と太刀「刀は美しい！」	刀バラバラ体験	91	70	161
5月	浮世絵を楽しむ	版画をする	94	44	138
6月	日本のデザイン	日本の文様を描いてみよう	65	26	91
7月	鎧と兜 「武士の晴れ姿」	鎧・兜にふれる―忍び紐の結び方―	117	79	196
9月	鉄砲伝来！	火縄銃にふれる	84	37	121
10月	茶道具	茶碗をデザインする	65	35	100
11月	やまと絵ってなに？	やまと絵を描いてみよう	48	21	69
12月	能面・能装束	能面・小鼓にふれる	41	15	56
1月	かな	かな文字を筆で書いてみよう			
2月	お雛さまを楽しむ	お雛さまを作る			
3月	さちぎみ様のお嫁入り道具	お琴をひいてみよう			
年間合計			605	327	932

平成28年は12月までの集計

こういった活動に参加する場合を除いて、学校側から特に解説や体験の依頼が無い場合が多く、子ども達は足早に展示室を通り抜け、来館した事実だけで、「見学した」とされる場合もあった。

そこで、同十五年から「土曜子ども教室」で実績と経験を積み上げたプログラムを校内・校外学習でも活用できるように改編して、ホームページやちらしで愛知県内の小・中学校に紹介し、「出張教室」の実施や学校の団体受入をするようになった。同二十三年からは「小・中学校の先生方のための伝統文化体験プログラムセミナー」を実施し、授業や分散学習・体験学習に活用出来るよう、徳川美術館の小・中学生向けのプログラムを紹介している。

その結果、小・中学校を中心に団体で「体験学習」を伴った見学・体験の依頼が増えるようになり、単に見学・素通りではない美術館の活用事例が漸増するようになった。ちなみに同二十七年度の体験学習は、貝あわせ・刀解体組立・火縄銃にふれる・甲冑着装・子ども出世すごろくなどの体験後、館内見学をするプログラムで実施し、小学校五件三百三十三名・中学校十二件六百三十四名・高校二件三十八名・大学（留学生含む）八件二百五十八名の計二十七件二百六十三名を受け入れた。

なお、体験を伴わない徳川美術館の紹介と作品解説を依頼された事例も、小学校五件百一十一名・中学校八件百十三名・高校一件十五名・大学一件六十名の計十五件二百九十九名あり、着実に学校現場の利用は増加している。これらはほとんどが当館ボランティアで対応している。

また、同二十六年からは夏休みの二日間、小・中学生を対象に「自由研究」を実施している。この活動はボランティアからの発案である。展覧会鑑賞後、研究テーマを確定、研究動機を明確にし、予想を立て、調べる。



挿図4 夏休み子ども歴史教室 自由研究

調べた結果を予想と照らし合わせながらまとめ、感想を書き、発表する。鑑賞だけではなく、展示や展示作品から疑問に思うことを発見し、予想し、答えを導く方法を学ぶことができる場にすることを目的とした事業である（挿図4）。

これらの活動は、同十八年十二月に教育基本法が改正されたのに伴い、改正された学習指導要領の基本的なねらいを具体化することを目途としている。つまり、完全学校週五日制の下、各学校が「ゆとり教育」の中で「特色ある教育」を展開し、子どもたちに学習指導要領に示す基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせることはもとより、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育むねらいである。

ただし、これは参加する小・中学生に個別に対応・補助する内容であるため、一度に多くの参加者を受け入れることは出来ず、実施時期も限定的であるため、必ずしも徳川美術館がこの教育方針を普遍的に体现しているわけではないことが、今後の課題として残されている。

また、子ども達と展示室で展示作品を鑑賞する際に、観察力や鑑賞力を高めるための一助としてワークシートを導入しているが、改善の余地は少なくない。徳川美術館では子ども向けワークシートと銘打っているものの、内容は説明的で、さまざまな発見をするための工夫が足りないことが課題である。

一般向けの展示解説についても同様で、一方的に説明するだけに終わる場合もあり、教育普及活動に携わる職員・ボランティアの全般に、その理念が行き渡っていないのが現状である。研修などを通して今後も絶えず改善を模索しなければならないことは言うに及ばず、対話型鑑賞教育プログラムといった近年開発された事例を参考に、徳川美術館ならではの日本の古美術品を鑑賞する新たな作品鑑賞プログラムの構築といった試行を続ける必要がある。

実のところ小・中学生を対象にしたプログラムを開始した当初、徳川美術館内では小・中学生は徳川美術館が対象とする来館者ではない、静かに鑑賞する空間の妨げになるという理由から、必ずしも全面的な賛同を得られていなかった。しかし、教育普及活動を継続し実績が目に見えるようになったことで、自然に職員の意識も変化し、今では徳川美術館の重要な事業に位置付いている。教育普及活動の内容について議論の余地はあるものの、子どもたちが自発的に作品を鑑賞し、作品の背景にある歴史に関心を持ち、自ら学べる場所をつくり、将来の徳川美術館ファンを増やす一つの

機会とする意味でも、教育普及活動は今後も徳川美術館の重要な活動の一つに位置付けていく必要があると考える。

なお補足であるが、徳川美術館が前項で紹介した小・中学生中心のさまざまなプログラムを実施できたのは、次に紹介する文部科学省および文化庁からの補助金によるところが大きい。以下、順に補助金の内容と、それによって得られた徳川美術館の活動内容について紹介する(表3)。

(一)親しむ博物館づくり事業(文部科学省)

平成十四年度の完全学校週五日制の実施に向けて、同十一年度から十三年度までに地域で子どもを育てる環境を整備し、親と子どもたちの活動を振興する体制を整備するための「全国子どもプラン」が実施された。博物館の有する機能を積極的に活用し、学校が休みの土曜日を中心に青少年が楽しんで遊びながら自然科学の原理、参加体験型の展示の開発やハンズ・オン(自ら見て、触って、試して、考えること)手法を用いた活動を導入することをはじめとする多様な事業をモデル的に実施し、その成果を全国に普及することを目的とした。

この事業への参加により、「夏休み子ども教室」の貝あわせ、甲冑づくり、刀剣の組立・解体、火縄銃の解体、狂言、すごろく遊びなどのプログラムを開発することができた。

(二)芸術拠点形成事業(文化庁)

平成十四年度から十六年度の三年間行われた「芸術拠点形成事業」は、文化庁が美術館・博物館等の行う展覧会その他の事業に対する支援を実施することにより、わが国の文化芸術拠点の形成を図り、もつ

てわが国の文化芸術水準の一層の向上に資することを目的とした。

この事業で同十四年に体験型教育普及「大名文化」教材開発として、組立・解体の出来る模造刀、着装できる鎧・兜、能面、小鼓、香道具を揃えることができた。これらの教材は当館の大名文化を紹介する主要なプログラムの中で現在も活用されている。

さらに、同十五年には「長篠合戦図屏風」および「長久手合戦図屏風」の原寸大複製品を作成した。「長篠合戦図屏風」は小・中学校の社会科の教科書には必ず掲載されており、子どもたちの関心が高い。実際の大きさと細部を間近にじっくり見ることで、屏風に描かれた多くの出来事を読み解くことができる。

(三)子どもゆめ基金助成金(国立オリンピック記念青少年総合センター)

この基金は、未来を担う夢を持った子どもの健全な育成の一層の推進を図ることを目的に、民間団体が実施する特色ある新たな取組や、体験活動等の裾野を広げるような活動を中心に、様々な体験活動や読書活動等に支援されている。

この助成で、平成十四年に「江戸ヘタイムスリップ 尾張の殿様よしなおくんからの手紙(メール)」を開発、インターネットで公開した。
(<http://www.yoshinao.net>)

当時インターネットでの子ども向けのプログラムが少ない中、アニメ動画で徳川家康や江戸時代や大名文化を紹介する画期的なプログラムだった。メールアドレスを登録すると十通の手紙(メール)が毎週届き、それを開くと徳川家康、鎧兜・刀・茶道具などが紹介される(挿図5)。

表3 徳川美術館 補助金事業

年度	事業	補助事業名	補助金額	補助内容
平成11年 1999		親しむ博物館事業(文部科学省)	2,547,116円	徳川美術館 夏休み子ども特別企画「歴史体験教室」 平成11年7月1日から平成12年3月31日 ワークシート作成、ギョウリョウ・クイズ、小中学生の歴史教室「三英傑」、歴史体験教室「作って遊ぼう貝あわせ」、親と子の甲冑手作り教室
平成12年 2000		親しむ博物館事業(文部科学省)	2,208,007円	歴史体験教室「みて、ふれて、つくって大名文化！」 ①作って遊ぼう貝あわせ 8月1日～8月31日 ②親と子の兜手作り教室 8月5日・6日 ③刀・火縄銃ババラ事件！ 8月12日・13日
平成13年 2001		親しむ博物館事業(文部科学省)	1,803,256円	歴史体験教室「みて、ふれて、つくって大名文化！」 作って遊ぼう貝あわせ 8月1日～8月31日 親と子の兜手作り教室 8月11日・26日 大名の娯楽「狂言」 8月12日 若殿様が遊んだ『すごろく』 平成13年9月～14年3月の第2・4土曜日
平成14年 2002	毎週土曜日、「土曜子ども教室」がスタート	I 芸術拠点形成事業(展覧会事業等支援)(文化庁) II 子どもゆめ基金助成金(国立オリンピック記念青少年総合センター)	芸術拠点形成事業 3,989,065円 子どもゆめ基金 8,349,000円	I 芸術拠点形成事業 平成15年2月1日～15年3月31日 1. 土曜子ども教室 平成15年2月1日～15年3月31日 2. 体験型教育普及「大名文化」教材開発 ①刀ババラ体験 ②鎧・兜体験 ③能面・和楽器体験 ④閉香体験 II 子どもゆめ基金 江戸ヘタイルスリッパ 尾張の殿様 よしなおくんからの手紙(メール)
平成14年 2002		愛知県博物館協会「子どもと博物館研究会」	6,100,000円	地域連携事業「伝えるということは？学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ ワークショップ」 一宮市博物館・愛知県陶磁資料館・豊橋市美術館・鳳来寺山自然科学博物館 各館での10本のワークショップを実施。報告書・DVDの作成
平成15年 2003		芸術拠点形成事業(展覧会事業等支援)(文化庁)	3,952,465円	体験型教育普及「大名文化」教材開発 1. 原寸大複製の作成 ①長篠合戦図屏風・長久手合戦図屏風 原寸大複製 ②本多平八郎姿絵屏風 原寸大複製 ③徳川家康三方ヶ原戦役画像 原寸大複製 2. アウトリーチ活動のためのボランティア研修

平成16年	2004	徳川園・蓬左文庫リニューアル・オープン	I 芸術拠点形成事業(展覧会事業等支援)(文化庁)「尾張の殿さま よしなおくんと大名文化体験」 II 地域子ども教室推進事業(文部科学省)	I 7,715,800円 II 2,526,000円	I 尾張の殿さま よしなおくんと大名文化体験 I オリジナルDVDソフトの開発・製作 II 土曜子ども教室 平成16年9月1日～平成17年3月31日
平成17年	2005	開館70周年	地域教育力再生プラン 地域子ども教室推進事業(文部科学省)	1,339,005円	土曜子ども教室 平成17年9月～平成18年3月31日 夏休み子ども教室 8月2日～31日 ボランティア研修 琴・小鼓・子どもへの話し方・接し方
平成18年	2006		地域教育力再生プラン 地域子ども教室推進事業(文部科学省)	2,324,640円	土曜子ども教室 平成18年4月1日～平成19年3月31日 夏休み子ども教室 8月1日～31日
平成19年	2007	新館開館20周年	芸術拠点形成事業(ミュージアムタウン構想の推進)(文化庁)	4,370,319円	徳川美術館「子どものための大名文化体験プログラム」 ① 子どものための大名文化体験プログラム 土曜子ども教室 平成19年9月～20年3月末 夏休み子ども教室 8月1日～31日 ② 子どものための大名文化体験プログラムを実施する人材の育成 救急、マナー、話し方、陶磁器、刀剣、能 ③ 子どものための大名文化体験プログラムのハンドブックの作成
平成20年	2008		芸術拠点形成事業(ミュージアムタウン構想の推進)(文化庁)	2,757,438円	徳川美術館「大名文化プロジェクト—地域伝統文化プログラムと子どもプログラムの継続と拡大— 1. 地域伝統文化プログラム ① 雅楽 ② 琉球の宮廷音楽「御座楽」復元演奏 2. 子どもプログラムの実施 土曜子ども教室 平成20年9月～21年3月31日 夏休み子ども教室 8月1日～31日 3. 小中学校教員のための大名文化体験プログラムセミナー
平成21年	2009		美術館・博物館活動基盤整備支援事業	239,720円	徳川美術館「大名文化プロジェクト2009—視聴覚障害者および教員へ教育普及プログラムの拡大—」
平成22年	2010		美術館・博物館活動基盤整備支援事業	1,216,570円	徳川美術館 地域密着型「武家文化」普及プログラム ① 小・中学生の「大名古屋城展」セミナー 平成22年8月1日～30日 大名古屋城展タイズ、歴史教室「名古屋城のひみつ」、歴史体験教室「貝あわせ」、「親子兜づくり教室」、親子名古屋城下探索ツアー ② 小・中学生生徒のためのワークシート「徳川美術館へようこそ」作成事業 ③ 留学生のための鑑賞会 平成23年2月12日 雛まつり展の解説、講座「香の歴史と文化」、ワークショップ「香袋づくり体験」

平成23年	2011	文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業(文化庁)	2,175,000円	徳川美術館 地域密着型「武家文化」普及プログラム—徳川の姫君大研究— 平成23年7月1日～8月31日 ①姫君の装い「結髪実演」 平成23年8月6日 ②夏休み子ども特別企画「徳川の姫君 大研究」 平成23年8月2日～8月31日 ギャラリー・クイズ、手引書の配布、鑑賞カードの配布 小中生の歴史教室「徳川の姫君」 姫君体験「貝あわせ」 和歌教室 8月20日 ③小・中学生教諭を対象とした伝統文化体験プログラムセミナー 平成23年8月3日
平成24年	2012	文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業(文化庁)	1,282,500円	①子ども向け夏休み講座(徳川美術館・名古屋陶磁器会館・文化のみち 榑木館) 平成24年8月1日～31日 夏休み歴史講座 体験コーナー(相应寺屏風を楽しむ、貝あわせ)ワークシート、鑑賞シートの作成 ②サイトボランティア交流会(講演会)
平成25年	2013			
平成26年	2014	文化芸術振興費補助金(伝統文化親子教室事業)(文化庁)	443,158円	大名の歴史と文化伝承プログラム ①夏休み子ども歴史教室「天下統一 信長から家康へ」 平成26年8月1日～31日 ギャラリー・クイズ、歴史教室、歴史体験教室、ワークシートの配布、自由研究 ②土曜子ども教室 平成26年7月1日～平成27年1月31日
平成27年	2015	文化芸術振興費補助金(文化遺産を活かした地域活性化事業)(文化庁) 名古屋文化遺産活用実行委員会		「文化のみち 離巡り」スタンプラリー 名古屋文化遺産活用実行委員会(名古屋城・名古屋市政資料館・文化のみち 榑木館・文化のみち二葉館・名古屋陶磁器会館・名古屋市蓬左文庫・徳川園) 屋市蓬左文庫・徳川園)
平成28年	2016	文化芸術振興費補助金(文化遺産を活かした地域活性化事業)(文化庁) 名古屋文化遺産活用実行委員会		「文化のみち 離巡り」スタンプラリー 名古屋文化遺産活用実行委員会(名古屋城・文化のみち 榑木館・文化のみち二葉館・名古屋陶磁器会館・名古屋市蓬左文庫・徳川園)
平成29年	2017	新館開館30周年 文化芸術振興費補助金(文化遺産を活かした地域活性化事業)(文化庁) 名古屋文化遺産活用実行委員会		「文化のみち 離巡り」スタンプラリー 名古屋文化遺産活用実行委員会(名古屋城・文化のみち 榑木館・文化のみち二葉館・名古屋陶磁器会館・名古屋市蓬左文庫・徳川園)



挿図5 「江戸ヘタイムスリップ! 尾張の殿さま よしなおくんからの手紙(メール)」画面

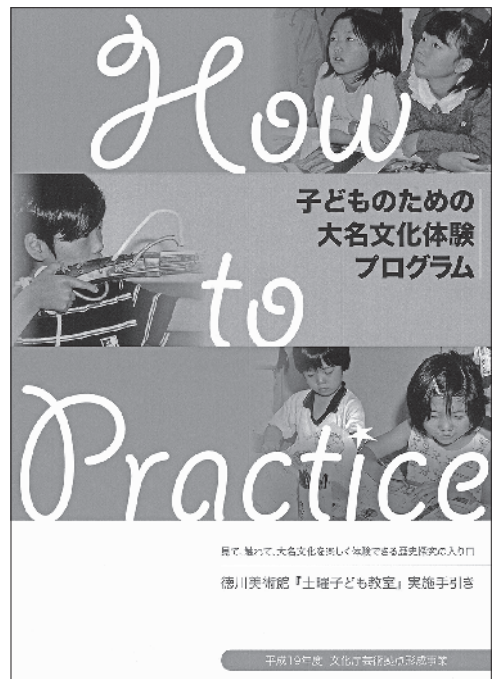
(四) 地域教育力再生プラン(文部科学省)

このプランは、近隣住民間の連帯感の希薄化や青少年の問題行動の深刻化などが進む中で、地域の教育力の再生を総合的に進める観点から、地域に根ざした多様な活動機会を提供する事業である。

子ども向けプログラムを進行・指導しているボランティアは美術館周辺の地域住民である。そのボランティアの資質向上を図る目的で、徳川美術館において研修を実行した。

(五) 芸術拠点形成事業(文化庁)

この事業の一環として、平成十九年に『子どものための大名文化体験プログラム—徳川美術館『土曜子ども教室』実施手引き』を作成



挿図6 『子どものための大名文化体験プログラム』表紙

した。これは徳川美術館のプログラムが他の美術館・博物館や小・中学校での教育普及開発の参考になれば、と主要なプログラムを掲載・紹介し、全国的美術館・博物館、愛知県内の図書館、小・中学校に配布した(挿図6)。

(六) 美術館・博物館活動基盤整備支援事業(文化庁)

平成二十一年には視聴覚障がい者を受け入れるためのボランティア研修を実施し、プログラムを開発した。障がい者の方を正しく理解し、対応するため、実際に障がい者の方に来ていただき、鑑賞プログラムを実施した。最近では盲学校の修学旅行や聾学校の見学を受け入れ、鑑賞や体験を実施している。

また、同二十二年には国際交流のひとつとして留学生のための鑑賞会を開催した。以後、市内の大学や高校の留学生の体験を受け入れる

ことが多くなっている。

三 教育普及事業に関わる連携

(一) 愛知県博物館協会「子どもと博物館研究会」

美術館・博物館の存続意義は時代と共に変化している。一九六〇年代末までの存在することに意味があった時代から、七〇年代には博物館とその活動が淘汰される時代となり、九〇年代は博物館のもつ社会的力量が問われる時代が変わっていった。⁽¹⁾

いずれの美術館・博物館も館の存在意義を探して、手探りで教育普及プログラムを実施するようになるなか、徳川美術館もまた同様に前項に掲げた諸事業を見出したわけである。そのような状況の中で、平成十一年（一九九九）に愛知県博物館協会内において「子どもと博物館研究会」が三十施設、四十四名を会員として発足した。教育普及活動にまだ理解を得られない状況において孤軍奮闘する学芸員が集まり、博物館教育理論などの勉強会を開き、新たなプログラムを実践している施設の見学等の活動が実践された。そして美術・博物・民俗・自然など種別の違う館の学芸員が集まり、各々のプログラムの運営方法や悩みを共有し、自館のプログラム作りの参考にして「あいち子ども体験ミュージアム事業」を立ち上げた。徳川美術館もこの研究会と事業に当初より参加している。

翌十二年には文部省が実施した「親しむ博物館づくり事業」に、この「あいち子ども体験ミュージアム事業」も参画した。まず愛知県博物館協会加盟百二十三館を対象に、子ども向け事業に関する現在までの収集・保

管・展示・解説・研究室等の施設・技術的研究・ホームページ・研究会・他館との交流・学校等との協力といった事業実績、将来の予定などについてアンケートで意見集約を行い、その集計内容を公開することで、各館の現状や抱える問題を把握し、今後の事業への糸口とした。

そして、「あいち子どもミュージアムキャラバン」という事業を実施し、「どろんこやきもの探検隊！」「わたしのパリはコレ！」「漁師は海のおさかな博士」「焼く・煮る・炊くは食の基本！」「編む・織る！縄文・弥生の布！」などといったそれぞれの博物館が実施する教育普及活動を一連の活動として広報活動を共有し、それぞれの博物館単体の事業として終わらせるのではなく、参加者を拡散させる工夫を凝らした。⁽²⁾ 前項で示した徳川美術館の活動も、この事業の一つとして紹介されたことで、愛知県下での周知・集客に役立った。

また、平成十四年度文化庁芸術拠点形成事業にも「あいち子ども体験ミュージアム事業」が参画し、一宮市博物館を会場として、普及・考古・陶芸・美術・歴史・民俗・自然の部門に分け、「伝えるということは？」学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ」をテーマに展覧会を開催、各部門でワークショップを実施して、報告書にまとめた。⁽³⁾ 分野の違う館が連携することで、新たなプログラムが開発できたことは、この事業の第一の成果といえよう。

徳川美術館においても、この「子どもと博物館研究会」に参加することで、教育普及プログラムが徳川美術館にとってなぜ必要かを理論的に考え、説明することが出来るようになり、具体的に教育普及プログラムを組み立てるのに参考になった。

(二) 文化庁「ミュージアム・エデュケーター研修」

欧米諸国の博物館では、研究者としてキュレーター、教育プログラムの作成者としてエデュケーター、そして教育活動を担当するミュージアムティーチヤーといった職務分担がある。さらに作品・資料の取り扱いについても整理・管理・利用担当者などに細分化されている。日本においては、こういった活動を行う職務を「学芸員」と総称し、作品・資料の収集・整理・保管・展示・研究といった博物館の基本的な事業から、事業を計画・主催したり、博物館利用者に対面し、その質問に答え、博物館によってはチケット・物品の販売、展示室内の監視まで行う場合もある。博物館の活動主体を、作品・資料の収集・整理・保管・展示・研究に置くのが大半で、それ以外の事業は片手間にならざるを得なかったのが実状である。

そうした中、日本においても平成四年（一九九二）以降、博物館学や教育学などの分野の教育を受け、学芸員と協力して事業を進めることを専門とする（エデュケーターの）職員が現れた。日本のエデュケーターは、国内での専門的な教育の場がなく、今後の動向についても不透明な部分がある。現在、美術館・博物館では明確な利用目的を持った来館者を対象に事業を行っているが、展覧会を漠然と観に来る多数の来館者や、美術館・博物館に来ていない地域住民に対しての利用を促す努力はされていない。関心の薄い人に来館してもらうためには、博物館の役割を理解し、利用者に対応できるエデュケーターという専門員が必要である。

エデュケーターには学芸員の知識を活用しながら、博物館での学びをデザインし、プログラム化することが求められる⁽⁴⁾。エデュケーターの役割の重要性を考えて、同二十三年度から文化庁が年一回五日間、博物館教育・

生涯学習・地域連携に関する座学や教育プログラムの開発など、教育普及を担当する職員に必要な知識・技能や基本姿勢を習得するための研修を行っている。第六回である同二十八年度までに延べ約三百名の受講者を数える。筆者も企画運営委員として参加している。

筆者を徳川美術館のエデュケーターに位置付けるか否かについては、組織的に明確では無いものの、前述のとおり徳川美術館新館が開館して以来本格化した教育普及活動に一貫して携わっており、ノウハウの継承を責務とされていることは間違いない。そのため、筆者自身の資質向上と、徳川美術館へのノウハウ導入に資するように、よりよい博物館教育の運営に日々試行錯誤している。我田引水ではあるが、研修の企画運営委員や研修者との交流は当館の教育プログラムを開発・改善するのに参考になっている。

以上の二例のように、徳川美術館の教育普及活動は、徳川美術館単体で実施するに留まらず、活動が安定するのに伴い、他館や外部機関との連携も視野に入れて活動を行うようになっていった。また、徳川美術館の活動自体が、モデルケースと見なされる事例もあり、外部との相互の交流から徳川美術館が得た成果も大きい。

ただし、徳川美術館における教育普及事業は定着したと言えるものの、それを実施する職員をエデュケーターとして固定するのか、あくまでも職員の輪番とするかの議論は、なお今後の課題である。筆者自身に課されているのは後継者の育成だが、作品の保存・管理・調査・研究、展示業務を主務とする学芸員として採用された職員が大部分を占める学芸部内、または事務部内において、現状では専任的な業務の継承がなかなか難しいのが現状である。

表4 徳川美術館 ボランティアの会

年度		美術館行事	ボランティア活動
昭和61年	1986		ボランティア募集
昭和62年	1987	新館開館(10月)	第1期生 活動開始日：10月1日 350名
平成2年	1990		第1期展示解説員 47名 活動開始
平成3年	1991		第2期生 活動開始日：4月1日 95名
平成7年	1995	開館60周年	第3期生 活動開始日：4月1日 95名
平成9年	1997	新館開館10周年	
平成11年	1999		第2期展示解説員 13名 活動開始
平成14年	2002		第4期生 活動開始日：4月1日 61名
平成16年	2004	徳川園・蓬左文庫リニューアル・オープン	第5期生 活動開始日：4月1日 92名 受付対応ボランティア 活動開始日：4月1日 定年制度導入(77歳)
平成17年	2005	開館70周年	
平成18年	2006		第3期展示解説員 16名 活動開始
平成19年	2007	新館開館20周年	第6期生 活動開始日：4月1日 72名
平成21年	2009		第7期生 活動開始日：4月1日 69名
平成22年	2010		交通費支給廃止
平成23年	2011		第8期生 活動開始日：4月1日 33名
平成25年	2013		第9期生 活動開始日：4月1日 90名
平成27年	2015	開館80周年	
平成29年	2017	新館開館30周年	第10期生 活動開始日：4月1日(予定)

四 徳川美術館ボランティアの会と教育普及

徳川美術館の教育普及活動の中でも特筆すべきは、ボランティア活動である。徳川美術館のボランティア制度は、昭和六十二年(一九八七)十月の新館開館にあわせて発足した。新館開館が地元市民や経済界および自治体の寄附によって行われたことで、新館開館後も地域社会と徳川美術館が密接な関わりを持って、地域文化の向上を図ることが重要な使命とされた(表4)。

展示空間の拡大によって職員のみでは来館者への対応が充分出来ないという事情も含め、地域との連携策として検討されたのがボランティア制度の導入である。徳川美術館と地域の人たちを結ぶパイプ役として、地域の生の声を徳川美術館に届け、共に徳川美術館の情報を地域に拡げることにも目途としている。また、徳川美術館の運営に参加してもらうことで、徳川美術館に対して親しみを持ち、徳川美術館のことを我が事のように考え、応援してくれる人が一人でも多くなる願いも含まれる。

当時の国内の美術館・博物館でボランティア制度を導入している館は少なかったが、同五十二年にアメリカで開催した「The Tokugawa Collection No Robes and Masks」や同五十八年から五十九年にかけてアメリカ・ドイツ・フランスで開催した巡回展「The Shogun Age Exhibition」の開館館で見聞した経験が活かされることとなった。ことにアメリカでは専任スタッフの充実もさることながら、ボランティアスタッフがあらゆる分野で活躍していること、ある館では切符もぎりやレストランのウェイトレスまでも担当しており、「マイ・ミュージアム」という意識で愛情が溢

れている姿に接したことが現地へ赴いたスタッフから驚きをもって報告された。新館開館に当たって、徳川義宣前館長はじめ館員一同がボランティア制度を導入することを決めたのは自然な成り行きだった。

ボランティア活動とは、自発性・無償性・公益性という性質を持った活動である。ボランティア活動の動機は日常生活を充実させるといったことであり、生き甲斐や人との交流を求めてボランティア活動を始める人も多く、ボランティア活動を通して学習や成長をする。人や社会によってボランティア活動の意義や価値をどう捉えるかは変化し、それゆえ、ボランティア活動は多様な捉え方ができる。

社会教育施設におけるボランティア活動は一九七〇年代から少しずつ登場し、八〇年代には全国各地で本格的に行われるようになり定着した。社会教育施設の基本的な役割は、子どもだけでなくさまざまな利用者の学習活動を支援することであり、その意味では社会教育施設におけるボランティア活動もまた、施設を利用する一つの形態(学習活動)であると理解することができる。それぞれの施設の状況をふまえつつ、その活動の意味を常に考えることが重要である。⁽⁵⁾

徳川美術館ボランティアの会が発足した昭和六十一年の会則には、「徳川美術館と協力し、無償の奉仕活動を通じて市民のための美術館活動を促進し、同時に美術に対する理解と関心を深め、地域文化の向上をはかることを目的とします」とある。

ボランティアの会会則

第一条 本会はその名称を「徳川美術館ボランティアの会」とし、事務局を徳川美術館(名古屋市中区徳川町一〇一七)業務部内におきます。

第二条 本会は徳川美術館の指導のもとにおかれます。

第三条 本会は徳川美術館と協力し、無償の奉仕活動を通じて市民のための美術館活動を促進し、同時に美術に対する理解と関心を深め、地域文化の向上をはかることを目的とします。

第四条 本会会員の期間は四月一日より翌年三月三十一日までとし、単年度ごとの更新とします。

第五条 本会は目的を達成するために次の活動を行ないます。

- (一) 来館者に対する案内・誘導
- (二) 展示室内の監視

(三) 展示室の展示効果の維持管理への協力

(四) 館内美化

(五) 美術館関係資料(ポスター・ちらし)の配布協力

(六) 会員相互の研修活動

(七) その他必要な事業

第六条 本会の会費は無料とし、会員は活動日には交通費の支給を受けることができます。

第七条 会員は徳川美術館が行なう事業に参加または優待を受けることができます。
(昭和六十一年)

いわば、徳川美術館の応援団といった位置付けである。新館開館を前に、地域の連携ということで、まずは地域の女性団体「旭丘女性会」や昭和四十四年に徳川美術館元館長の熊沢五六(二八九六―一九八七)によって創設された、仏教・西洋・日本・東洋美術を自主学習する婦人グループ「葵美術グループ」、同四十八年設立の社会貢献を目的とする女性奉仕

団体「東海レディス・プラザ」に声をかけた。さらに人員を確保するため、十八歳から七十歳までの月三回以上活動出来る方を条件にボランティアスタッフを広く一般から募集した。人員募集の件が新聞に紹介されると、五百名を超す応募があり、予想以上に市民の注目が高いことに驚かされた。なお、三分の二以上は五十代以上の女性であった。学芸員やマナーの専門家による五日間の研修全日参加を採用条件として研修を実施し、三百五十名が一期生のボランティア人員として誕生した。

平成二十八年(二〇一六)現在のボランティアの男女比率は、男性二十九名(一〇%)、女性二百六十二名(九〇%)で、圧倒的に女性が多い。年代の分布は、二十代二名、三十代一名、四十代六名、五十代二十三名、六十代百三十四名、七十代百二十五名である。女性の場合は子どもの独立後、男性の場合は定年退職後に携わる例が多く、社会貢献という意識はもとより、生涯学習の場としてボランティア活動に参加しているともいえよう。ボランティア活動の内容としては、次のような作業があるが、ルーティンで行う活動は①③、不定期の活動は④⑨である。⑩以降は特技を持つている方々が独自に協力する活動で、当該者が退会した場合、休止することもある。

- ①館内における来館者案内誘導・展示室の監視
- ②展示解説(通常・団体、体験プログラム)
- ③インフォメーション業務
- ④子ども向けプログラムの進行・解説
- ⑤印刷物の発送作業
- ⑥職員用図書室の図書整理

徳川美術館教育普及活動三十年の歩み

⑦新聞整理(博物館・文化関連記事の切り抜き保管)

⑧教育普及講座等の受付

⑨ポスター貼りなどの広報補助

⑩古文書の読解(平成十二年以降休止中)

⑪館内の生花飾り

⑫点字による館内案内の作成

⑬講演・講座会場での題字・演目執筆

⑭展示補助具作成・修復

ボランティア活動が始まった当初は、職員もボランティアも全てが初めてのことで、手探り状態での活動開始であった。参加希望日を各ボランティアに聞き、担当職員が二ヶ月毎のシフト表を作成していた。月に一日出勤し、新館内の第一～第五展示室までの五ヶ所、本館内の第七～第九展示室までの三ヶ所と、インフォメーションカウンターに各一名の計九名を配置し、約一時間ごとにローテーションで移動し、展示室内の来館者誘導や来館者応対にあたった。

平成十七年(二〇〇五)には隣接する徳川園・名古屋市蓬左文庫がリニューアルし、名古屋市蓬左文庫展示室が徳川美術館の展示室と渡り廊下で行き来出来るようになり、名古屋市と共同で展覧会を実施するようになった。展示スペースが増えたことで、現在は一日に展示室対応十二名、受付二名、解説一名で運営している。

毎朝、九時四十分には徳川美術館新館ロビーに当日のボランティア全員が集まり、ミーティングを行う。そこでローテーションと当日の展覧会や催事・団体受入予定・連絡事項を記入したプリントを配布する。開館五分前

には各展示室にスタンバイし、十時からの来館者に備える。昼休みは十二時から十四時の間に二または三グループに分かれ、一時間の休憩をとる。同じく十五時から十六時の間に三十分の休憩をとる。一般ボランティアは四～五名を一グループとし、三グループが新館の名品コレクション展示室（第一～第五展示室）、名古屋市蓬左文庫展示室（展示室一・二）と本館（第七～第九展示室）の三ヶ所を十時～十二時・十二時～十五時・十五時～十七時の時間で、順番に会場を替わる。さらに、グループ内での相談の上、ローテーションを組み、各展示室で順次配置場所を移動している。

また、展覧会のポスター・ちらしの発送準備などの作業もあり、作業日当日のボランティアの中から数名が作業室で活動する。入館受付終了時間の十六時三十分からは来館者が減るので、クリンタイムとして、翌日のために展示ケースのガラス拭きをする。十七時閉館の案内放送が流れると、来館者の退出を確認し、控え室で帰りのミーティングを行い、一日の出来事を報告する。当初は交通費として活動日一律に千円の支給があったが、同二十三年からは交通費の支給がなくなり、代わりに当館の招待券を配布している。

ボランティアの会発足の二年目に、会員から解説員の希望者を募り、研修後、筆記試験や解説テストに合格した解説ボランティア四十七名が誕生した。当時、学芸員による徳川美術館の歴史、各展示室の特色などの研修は行われていたが、詳細な展示解説までは行っていなかったため、ボランティア各自がプライベートな勉強会を開いていた。こういった方々を正規の「解説」ボランティアとして位置付け、運営するため、学芸員ともども研修を実施し、来館者案内用の台本を作成していった。

解説ボランティアの活動は、平日は十一時・十三時三十分・十五時から

の三回、約一時間かけて新館内の名品コレクション展示室を同伴解説する（活動開始当時は午前午後の一・二回だったが解説ボランティアと随時話し合い、現在に至っている）。土日祝日は玄関ロビーで一日五回、各回約十五分間、美術館概要を紹介する。解説員は月に一回のシフトだが、これとは別に同二十七年度は百三十五件の団体解説を担当した。同二十八年現在、解説ボランティアは二十五名が活動している。そのうち二十八年度のキャリアをもつベテラン解説員が五名いる。一般ボランティアから解説員を募集し、試験を経て解説員となるが、募集は不定期である。現在、解説員四期生を選考しており、同二十九年度より十六名が新たに活動を開始する予定である（挿図7）。

一般ボランティアの活動には、展示室内の来館者誘導や来館者対応の他に受付対応業務・団体体験補助といった活動がある。受付対応業務は、新



挿図7 解説ボランティア



挿図8 受付対応ボランティア



挿図9 一般ボランティア



挿図10 体験講座「和の香りを楽しむ—聞香—」の運営

館入口脇のインフォメーションカウンターでの来館者対応であるが、ボランティア制度発足当初は展示室内配置のローテーションに組み込まれ、ボランティア全員が担当していた。しかし、交通案内など様々な問い合わせに対応するためには適切な人材が必要ということで、マナーなどの研修を経た受付対応専門のボランティアが平成十六年に誕生した。一日二名で、一時間毎に交代でインフォメーションカウンターに座り、カウンターにいない時は新聞の整理、展示室での場内整理にあたっている(挿図8・9)。

また、同十四年から十五名以上の団体を対象に体験講座「箱の紐のかけ方」「掛け軸の扱い方」「和の香りを楽しむ—聞香—」「貝あわせ」を有料で開始し、この団体の受け入れから解説および体験の進行すべてをボランティアが行うようになった。現在は「箱の紐のかけ方」「掛け軸の扱い方」は実施していないが、「和の香りを楽しむ—聞香—」「貝あわせ」は継続し

ており、同二十七年度は小・中学校のPTAや海外旅行者など三十五件の団体を受け入れた(挿図10)。

同三年からの夏休み子ども教室の運営、同十四年からの土曜子ども教室の運営・指導もボランティアが担当している他、端午の節供企画として実施した「親子甲冑着付教室」や個人向け聞香体験など、徳川美術館で実施する企画や行事の手伝いもしている。こういった事業を実施するにあたり、ボランティアと何度も研修や打ち合わせを重ね、内容や進行方法を確認し、台本を作り上げていった。また、それらの活動実施の参考とするために、他の美術館・博物館を見学したり、カルチャーセンターに通うなど、自主的に勉強しているボランティアも多数いる。また、こういった事業に参加する視覚・聴覚障がい者に対しても適切な案内ができるように、同二十一年から視覚・聴覚障がい者の対応のための研修を実施した。

活動の例示でも挙げたように、徳川美術館職員図書室での資料の分類・配架・整理や、講座の受付、館内に生花を活ける、講演会の題字を書くなど、ボランティアの活動は多岐にわたっており、今や徳川美術館の運営において、必要不可欠の存在として位置付けられている。

ボランティアは月に一回の活動であるが、この活動を平均的に実施するには、約三百名のボランティアが必要である。ボランティア活動は一年ごとの更新で、年間約十名が様々な事情で退会する。登録人数が三百名を切ると、新たに募集を行い、三十年間で九回の募集、ボランティアは延べ九百五十七名を数えた。平成二十九年四月からは十期生六十三名が活動を開始する予定である。平成十六年からはボランティアの高齢化問題から七十七歳の定年退職制度を設けることになったが、第一期生が活躍、二十名いることは特筆に価することであろう(表5)。

なお、ボランティア制度が始まってから、ボランティアの自主学习として、解説に関する勉強会「木曜会」、能に関する勉強会、ボランティア活動の国際化について考える会「TOFの会」が独自に作られ、自発的に学んできた。「TOFの会」ではインフォメーションに置くための英語での案内マニュアルを作成している。その後、「木曜会」は「ぼたんくらぶ」に、「TOFの会」は「マグノリア」と名称を変え、現在も月に一回勉強会や見学会を実施しており、徳川美術館は会議室などをその活動の場として提供している。

ボランティア活動を開始してから三十年の節目を迎えるが、これまでに運営方法の不備、研修の不足、ボランティア間の活動に対する意識の違い、ボランティア同士の間関係などさまざまな問題が生じ、その都度、問題を解決して現在に至っている。未だに解決されていない問題や課題もある。しかし、発足当時は美術館運営の補助としての役割が多かったボランティア活動が、ボランティアアンケートからもわかるように、今ではボランティアは積極的に美術館の事業に参加し、美術館が個人個人の自発的な生涯学習の場となっている(表5)。徳川美術館のボランティアは、徳川美術館のボランティアであることに誇りを持って活動しており、その熱意と活動は徳川美術館が誇る宝物の一つとなっていると言える。

おわりに

近年、博物館・美術館は展覧会だけでなく、講座や展覧会企画、小・中学校の受け入れなどの活動によって親しまれる場所となるように努力し、認識されるようになってきたが、徳川美術館は未だに高尚な場所という利

表5 ボランティア 教育普及 意識調査(平成28年8月6日～9月10日)

① 291名にアンケート(回答197名、回答率67%)

① ボランティア活動を通じて
ご自身が変わったと思いますか？

大変変わった	11	5.6%
変わった	58	29.4%
少し変わった	93	47.2%
変わっていない	29	14.7%
無回答	6	3.0%

② ボランティア活動がきっかけで
学び始めたこと、学んでいることはありますか？

ある	104	52.8%
ない	82	41.6%
無回答	11	5.6%

性別

男性	20	10.2%
女性	170	86.3%
無回答	7	3.6%

年代

20歳代	1	0.5%
30歳代	0	0.0%
40歳代	4	2.0%
50歳代	16	8.1%
60歳代	104	52.8%
70歳代	58	29.4%
無回答	14	7.1%

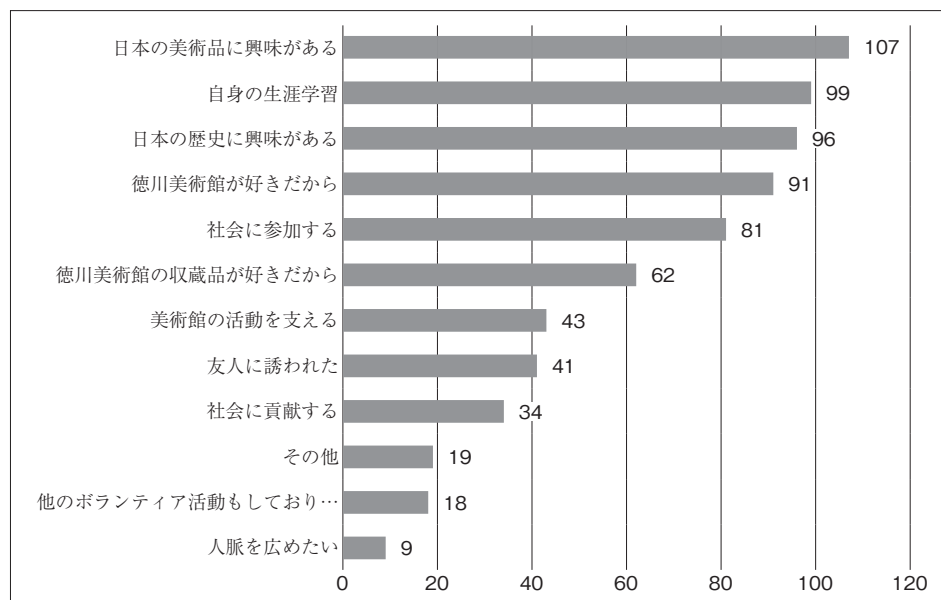
何期生ですか？

1期生	12	6.1%
2期生	9	4.6%
3期生	8	4.1%
4期生	21	10.7%
5期生	27	13.7%
6期生	19	9.6%
7期生	30	15.2%
8期生	17	8.6%
9期生	43	21.8%
無回答	11	5.6%

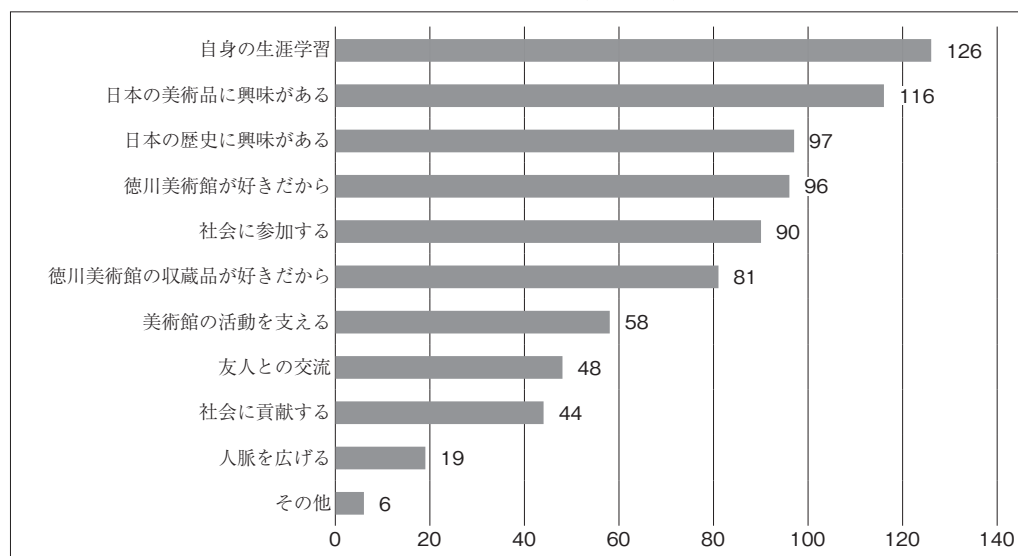
活動種別

一般	132	67.0%
受付	27	13.7%
解説	12	6.1%
その他	2	1.0%
一般・解説	1	0.5%
受付・解説	2	1.0%
無回答	21	10.7%

③ 徳川美術館のボランティアに参加しようと思った理由(複数回答)



④ 現在、あなたがボランティア活動をする目的は何ですか？(複数回答)



⑤ ボランティア活動を通して自身が変わったこと

(146件解答の中からの抜粋)

「歴史が好きになった、もっと歴史を知りたいと思うようになった、関連の書籍やテレビを見るようになった」(27件)

「古美術・美術が好きになった」(14件)

「徳川美術館が好きになった。他の美術館・博物館へ行くようになった」(21件)

「興味や知識が広がった」(7件)と、ボランティア活動を通して歴史や美術に対する興味が深くなったという回答や、知識の向上が大半を占めた。

その他に「人への思いやりが出来るようになった、来館者にやさしく対応できるようになった」(14件)「人との交流が広がった」(11件)と人間関係の広がりを示す意見もある。

その他に「別の人生が広がった、世界が広がった、視野が広がった」(13件)、「社会に参加する、社会貢献する」(5件)、「責任感が持てるようになった」(2件)

- ⑥ ボランティア活動をきっかけで学び始めたこと、学んでいること
(116件解答の中から抜粋)
「歴史・郷土史・古文書、源氏物語、茶道・香道・能楽、英会話を文化センターや当館の講座で学ぶようになった」
- ⑦ 徳川美術館のボランティア活動はあなたにとってどのような意味がありますか？
(176件解答の中のおおよその内容)
「月に一回の活動が日々の生活のメリハリであり、知識や人間関係で刺激を受けている」との回答の他に、
ライフワーク・仲間との交流・自己研鑽・自己啓発・社会貢献・社会との繋がりというキーワードが多数見うけられた。

用者側の固定的なイメージが残っている。徳川美術館は、尾張徳川家伝来の大名道具を公開し、江戸時代の大名文化を当時のままに鑑賞できる、ほぼ唯一の美術館であるにもかかわらず、その魅力を広く紹介できていない。まだ来館していないが、将来徳川美術館を利用する可能性のある潜在的来館者に向けて、徳川美術館の楽しさを知ってもらうためにも教育普及活動は必要であり、学芸員による調査・研究、充実した展覧会の実施を元に、徳川美術館でしかできない学びを教育普及活動を通して提供し、かつ来館者に満足してもらえるようにする努力は続けていく必要がある。展示・教育・出版などによる教育的情報の発信や資料の提供だけでなく、ウェブサイト・SNSなどで徳川美術館の情報を発信することも美術館をより親しみやすくする柔軟な教育普及活動であると考ええる。これまでに様々な事業を試行錯誤の上に展開してきたが、これからも徳川美術館が社会人・主婦・児童・生徒・学生・高齢者・障がい者などすべての人にとっての自発的な学びの場となるよう、さらに教育普及活動の充実が必要と考える。

註

- (1) 伊藤寿朗『ひらけ、博物館』岩波新書 一九九一年三月。
- (2) 『あいち子ども体験ミュージアム事業報告書』愛知県博物館協会 二〇〇一年三月。
- (3) 『伝えるということとは？学芸員が贈る子どもたちへのメッセージ』愛知県博物館協会 二〇〇三年三月。
- (4) 黒沢浩『博物館教育論』講談社 二〇一五年六月。
- (5) 田中壮一郎監修、鈴木真理・馬場祐次朗・松村純子『入門子供の活動支援と青少年教育ボランティア』学文社 二〇一六年三月。

〈参考資料〉

小笠原喜康・並木美砂子・矢島國雄『博物館教育論 新しい博物館教育を描きだす』ぎょうせい 二〇一二年三月。

寺島洋子・大高幸『博物館教育論』財団法人放送大学教育振興会 二〇一二年三月。

布谷知夫『博物館の理念と運営―利用者主体の博物館学―』雄山閣 二〇〇五年八月。

金山喜昭『博物館学…入門地域博物館学の提唱』慶友社 二〇〇三年四月。

伊藤寿朗『市民のなかの博物館』吉川弘文館 一九九三年四月。

伊藤寿朗『博物館概論』学苑社 一九七八年五月。

〔付記〕新館開館から三十年間、日頃より当館の運営および教育普及活動を支えているボランティアの皆さんに心よりお礼申し上げます。共に試行錯誤しながら教育普及活動が続けてきた他の美術館・博物館の学芸員、文化庁「ミュージアム・エデュケーター研修」で意見交換や情報共有している文化庁の担当者および企画運営委員の皆さんに感謝申し上げます。また、本稿を執筆するにあたり、青山学院大学の鈴木真理先生に多くの資料を頂戴した。ここに記して謝す次第である。

（美術館 マネージャー）

金鯨叢書 第四十四輯 [年一回刊行]
— 史学美術史論文集 —

平成二十九年 三月 三十日 編集
平成二十九年 三月 三十日 印刷・発行

編集者 竹内 義 誠
徳川 義 崇

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会
電話(3950) 〇一一二番(代)

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所
電話(3950) 〇一一七番(代)

〒461-0023 名古屋市東区徳川町一〇一七
徳川美術館
電話(935) 六二六二番(代)

〒605-0089 京都市東山区元町三五五
株式会社 思文閣出版
電話(533) 六八六〇番(代)

〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町二
株式会社 図書同朋舎
印刷所 電話(361) 九一二二番(代)